

子供は両親に何を与えるか

—— ボツサードの研究を中心として ——

大阪学芸大学

小川正通

一、序

家族という形態は、歴と第一次的集団ともいわれ、人間の歴史とともに古い。その構造・機能は、時代・社会によつて変遷・相違があり、構成メンバーや機能は、縮小化の傾向を辿つているが、今日の文化社会においても、依然として家族は、その基礎的単位として存続しており、なお将来とても継続することであろう。

われわれは家族のうちに、子供として生れ、親に養われ、生活し、やがて新しい家族を形成し、子供を産み育てて、家族のうちに死んでいくのである。家族は血縁的・運命的、緊密な小共同体であつて、その中で子供は、家族の未来を担つている。ヘーゲルにあつては、「子供は家族の最高の全体性を現わし、自然的人倫の段階においての絶対者・永遠なるもの」であり、ゲゼルは「子供は人間史の結論でもあり序文でもある」と述べている。わが国は古来「まさされる宝子にしかめやも」の愛育の伝統をもつといわれ、親はわが子に

対して、盲目的な愛情を暗示しがちであつた。それはとにかくとして、或る学者は「未婚の人は1/3の生活、結婚した人は2/3の生活、子供をもつて初めて3/3即ち完全な生活」と説いている。

さて、「親が子供に与える影響」については、既に相当の業績が見られるが、「子供が親に与えるもの」而も「子供を中心とした子供の親への影響」に関する研究は、なお不十分のようである。——

わが国の俗言では、「子をもつて知る親の恩」とか「子はかすがい」等といつているが、この未開拓な分野を切り開いた研究として、ペンシルベニア大学の社会学教授ボツサードの「児童発達の社会学」(Bosard, The sociology of child Development 1948)中の一章をあげ、その大略に多少私見をも加えて、解説を試みたいと思う。この種研究の立ちおくれの理由としては、彼自身も大人の自己中心的主観的態度によると、指摘している。

一、子供が親に与える特殊的(個別的)影響

人子の時の弟妹の誕生は、関係数の急増となり、また祖父母や使用人等の新参加は、關係に質的变化をも加え、所謂「親子水入らず」でなくなり、新環境への順応を困難にし、子供に神経障害を起させることもなくはない。「年寄育ちは三文安」は、この意味からも解される。(2)逆に、家族成員の喪失は、相互作用過程の激減となるが、小家族の場合とくに問題である。即ち四人家族の一人減は、關係数六から三(1.2)減、三人家族の一人減は、三から一(2.3)の減少となる。親の死亡、応召、離婚等は、とくに家族への影響が大きい。(3)昔の大家族制の検討に役立つ。昔ローマのクインティリアンは、「人間性の探求には、一つの家族で十分な大きさだ」といつたが、故あることである。一世紀前のアメリカでも、祖父・おじ・おば・いとこ等を家族のうちに含み、關係数四五の一〇人家族が決して稀でなかつた。然し大家族の人間關係の複雑さにたえきれず家出した人、職業選択が家族数と關係ありと認められるものもなくはない。(4)今日の典型的な家族は、アメリカで四人家族・人間關係六であり(わが国では一世帯当り約五人・關係数約一〇)一世紀以前と比較して、關係数に大差を認めざるを得ない。小家族への変化は、家族生活全般に革命的影響を及ぼし、子供の社会化、家族成員の社会情緒的安心感、青年の政治的活動への要求等も、これと關係ありといわれている。(5)子女の増加に伴い、家族生活内の社会的経験は拡大しても、それに応じた親密關係が拡張されるとは限らない。子供の誕生が或る家族に対し、生活の豊かさを保障しても、他の家族には、親和的包容力の限界に突き当らせ、経済的困窮に陥らせ、生活の崩壊へと導く。(6)数学的公式としてのこの法

則も、厳密には数学的正確さを示さない。元來、人間關係は量的・質的両面に亘つており、数学的公式で律するには、余りに多様多次元的であるからである。従つてこの法則も、家族生活の複雑な過程の近似値、成員数に基ずく家族關係移動の一般的比率を示すに過ぎない。

四、子供が親に与える一般的(共通的)影響(続き)

(三) 家族への関心の拡大

子の誕生は、親をして家族への関心を發展させる。一般に第一児の誕生は、親が前に考え及ばなかつた事象に注意を向けさせ、或は考へていたとしても、新しい意味を賦与する。第一は、家庭經濟に關してであり、父親は己の職業に真剣味を加え、經濟上の長期計画の想を練り、従來無視した生命保險へ加入し、住宅に關する野心も盛んとなる。また地域社会への関心増大し、とくに子女の教育的環境としての適否を吟味するに至る。ここで所謂「基地の子」の現況や「孟母三遷」の故事に思い當る。もつとも英のラッセルは、「子供のないうちも多くの人々は、公共的精神に満ちているが、一度子をもつと、家族の福祉にのみ没頭してしまう」と、極端な家庭個人主義的傾向に対し警告を發している。わが国でも「子孫のために美田を買わず」との教えがある。然しボッサードによれば、「あとは野となれ山となれ」という如きは、皮肉な独身男の思想で、決して親のノーマルな感情ではあり得ないと。

(四) 長期に互る情緒的満足と再生の機会

親に生命の連続に対する情緒的満足感を与える。即ち子供の成長

発達への永続的関心を供し、未来への希望に生かさせ、その意味で親を幸福感にひたらせるからである。とくに親が老境に入った時、然りであろう。階級移動・一獲千金の機会に恵まれたアメリカと封建的家族制度下の立身出世主義のわが国とは、この点では大差がないのかも知れない。親は子供の生れる前から、或は男或は女と期待するばかりでなく、さらに自己の再びもどらぬ人生の失敗を、子とりもどさんと望み、所謂「見果てぬ夢」をわが子に見ようとする。その実、青年期の子と親とは、歴々ジエネレーションの断層の兩岸に立つているのではあるまいか。

(五) 子供（人間発達）への支配

人間の子供は、動物の仔と比較する時、幼児期は長く、無力で親に依存せざるを得ない。——それだけ陶治性が大きいのだが、従つて乳幼児は親に全面的支配権を譲渡している。ここに親の権力意志は、十分に満足されている筈である。とくに家族を国家に直結し、子供を人格として尊敬しない全体主義国家では、親の立場は愈々独裁的・圧倒的となる。幼児自身は、僅かに、自己の意のままになる人形・玩具・小動物において、権力意志を満すに過ぎない。それに反して、親は家庭外で受けた圧迫を、帰宅後歴々子供に押しつけ、うつつ憤をわが子において補償する。ここで親権が問題となるのだが、親の特権はまた親の自己反省への転機ともなる。子供の言行が「親を映す鏡」であり、道徳的価値判断が自己に依存することに驚き、所謂「負うた子に教えられる」ことも少なくない。かくて親たるの責任の自覚、人間性発展へと誘導する機会となる。

(六) 生命過程及び人生の意味への洞察

人間の成長発達の過程は、自己においてでなく、つとめれば、わが子において比較的容易に、客観的に観察・理解される。科学者にとつては、とくに絶好の機会であつて、その結果による学問への寄与も決して少なくない。また愛が愛に呼応する真実の親子関係を通して、自己の使命、(人間存在) 人生の意義を把握し、所謂安心立命の境地へも導くのではあるまいか。

五、むすび

以上、家族の発展に子供が果たす役割、即ち親へのプラスの面に重点を置いて種々述べてきた。然しマイナスの面については、必ずしも論議がつくされてないし、さらにそれ等は、子供の発達段階別にも検討さるべきであろう。もとより家族の制度・内容、文化的・社会経済的背景・条件を異にするわが国、とくに戦後の今日においては、親子関係の緊張・錯雑は甚だしく、「まなかいにもとなかりてやすいしなさぬ」愛児が、親に対し日々多くの心配を与えている。従つてこれらの事情に関し、徹底的な研究・調査が要請される。けんきよな立場では、われわれは今日でもルッソーとともに、「子供というものを少しも理解していない」といえるのであるから「親の喜びは秘密であり、同様に悲しみも怖れも秘密である」とは、ペイコンの言葉である。然しこの秘密の扉を人間形成・人間理解への一助として、子供中心の立場から、是非開いていきたいと考えるものである。